奨励

待ち望め

奨励	村上 渡〔むらかみ・わたる〕
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」

（ルカによる福音書　１章５―２５節）

歴史から

「ルカの福音書」は、異邦人ルカがローマ政府の高官であるテオピロと呼ばれる人に向けて書き送られたものです。しかし同時に、これは異邦人宣教（外国人に福音を伝えること）のために書かれた書でもあります。ルカはアンテオケ出身で、おそらくギリシア人の医者であっただろうと言われています。彼のギリシア語は際立って秀でており、また彼は、この書が入念な調査の結果であるということを主張しています。

この書物は、およそ２０００年前に起こった出来事が正確な事実であることを私たちに伝えるために書かれているのです。これは時を超え、私たちに向けて発せられているメッセージなのです。

解釈

今日読まれた聖句では、年をとったエリサベツの妊娠が奇跡であるということが強調されています。祭司であるザカリヤは神の御前に正しく生きていました。それにもかかわらず、夫婦の間に「子ども」はいませんでした。当時、この社会において子どもは神の祝福の典型的な形の一つでした。ある日、ザカリヤがくじで選ばれ、神殿に入って礼拝行為をしている時に、彼に主の御使いが現れてこう言います。「こわがることはない。（中略）多くの人もその誕生を喜びます」（ルカの福音書１章１３節　日本聖書刊行会『聖書　新改訳』１９７０年）。ザカリヤは年をとり、疑い深くなっていたのでしょうか、あるいは諦めていたからでしょうか。彼は「待ち望んでいた」我が子が与えられるという出来事を、真正面から喜んで信じることができなかったのです。「この喜びのおとずれ」を伝えるために御使いが遣わされたのですが、ザカリヤは信じなかったために彼の口は閉じられてしまいます。しかし、御使いの言葉に私たちは注目することができます。「ですから、見なさい。（中略）これらのことが起こる日までは、あなたは、ものが言えなくなります」（同２０節）。これらのこと、つまりヨハネの誕生の日までということになりますが、その日に何が起こったかを少し見てみましょう。「すると、たちどころに、彼の口が開け、舌は解け、ものが言えるようになって神をほめたたえた」（同６４節）。この恥からの解放を先に体験したのはザカリヤの妻でした。彼女は子を身ごもった時にこのように言っています。「主は、人中で私の恥を取り除こうと心にかけられ、今、私をこのように（妊娠）してくださいました」（同２５節）。

これらの出来事のなかで共通していることは、閉じられていたのが開かれたということです。それも神が閉じられていたということ。そして、神がご計画の時に開かれたということです。エリサベツは閉じられていた胎が開かれ、ザカリヤは閉じられていた口が開かれました。

およそ２０００年前、永遠の命に至る唯一の道が私たちに開かれました。それがクリスマスのテーマ、イエス・キリストの誕生です。彼は私たちの罪の身代わりとなって十字架に架かり、神との関係を回復し、永遠の命に至る道を開いてくださったのです。

ザカリヤとエリサベツの間に生まれた子はヨハネ（ヤハウェは恵み深い、という意味）と言い、キリスト（救い主）の出現を告げる預言者となりました。また、彼は民を神である主に立ち返らせる役目を担いました。我が子を待ち望んでいた二人に与えられた子、そしてその子が民をキリストに向けさせ、救い主を待ち望む心の準備をさせる者となったのです。その子の誕生を御使いはこう言っています。「その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生を喜びます」（同１４節）。

実践へと

さて、私たちはクリスマスが近づくなか、何を楽しみに待っているでしょうか。ある人はプレゼント、ある人はパーティー、ある人は大切な人とのとっておきの時間かもしれません。クリスマスを待ち望む期間をアドベントと言います。教会ではとびっきりの飾り付けをし、美味しい料理をたくさん作ります。そしてアドベント用のろうそくを用意するなど、さまざまな工夫をして、この期間を楽しみます。このシーズンは１年で一番、教会に活気が出る時ではないでしょうか。

他の例も挙げて、待ち望む生活について考えてみたいと思います。

皆さんは誕生日を楽しみにしていらっしゃいますか。私の家ではいつも家族みんなで、ご馳走とプレゼントの時をもっています。そのため、誕生日が近づくと妙にそわそわし、また同時にわくわくします。さらに、デートを控えている週の皆さんの生活はどうなるでしょうか。その日を楽しみに１週間、勉強に、仕事に精を出しますね。お仕事をされている方は、盆休み、仕事納め前は大変ですが休みがくるのを楽しみに頑張りますね。個人的な話をさせていただきますと、私の母は父が長期の出張から帰ってくる日が近づくと、家を隅々までとても綺麗にします。母に一度、なぜここまで綺麗にするのかと尋ねたことがあります。すると母は、「父に気持ちよく帰ってきてもらいたいからだよ」と言っていました。このように、待ち望む生活には張りが出ます、活気が出ます。そして力が出ます。

導入話

最後に、アフリカにある、ある難民キャンプの話をしたいと思います。山に囲まれた盆地にあるこの難民キャンプでは、戦火を逃れ、何万人という人びとが避難して来ていました。そして、誰もがその日その日を生きるのに必死でした。クリスマスの日、難民支援に来ていた一人の日本人ボランティアは、誰かに伝えたい衝動が抑えられないほどの出来事をそこで体験することになります。難民キャンプのちょうど真ん中に、キリスト教会のキャロリングチーム（聖歌隊）が来ていました。彼らが歌を歌いだすと、周りに集まっていた難民の人びとも合わせて歌いだしました。そして、少し離れたところでそれを聞いた人びとも歌い始めました。それはたちまち難民キャンプ全体の大合唱になっていったそうです。距離によって生まれる歌声の小さな時間差は、大きな轟きのように山々にまで響き渡りました。歌を歌う難民の顔には、かつて見なかったほどの笑顔があふれていたそうです。このキャロルを目撃した日本人は、自然にあふれ出てくる涙を堪えることができなかったそうです。

おすすめ

今の苦しみ・悲しみの向こうに希望がある。難民となってしまった彼らはその希望を思い出し、喜びが沸き起こったのではないでしょうか。待ち望む人生には喜びがあふれます。そして積極性が生まれます。聖書にはこんな言葉があります。

「主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」（イザヤ書４０章３１節　日本聖書協会『聖書　口語訳』１９８３年）。

待ち望む生き方は、何もクリスマスシーズンに限ったことではありません。神様は私たちが想像もつかないほど大きなプレゼントを持って、一人ひとりの人生に臨んでくださいます。一日一日を「待ち望んで」生きましょう。その生活は、喜びと楽しみにあふれたものとなるでしょう。

２０１３年１２月１７日　今出川火曜チャペル・アワー「アドベント讃美礼拝奨励」記録